

第3話 大国主 命 の国譲り

素戔嗚尊の御子の大国主 命 は出雲地方を平らげてお治めになっていたが、
高天原朝 廷の命令に 従 われて、その領地をお返しになった。



鳥取

因幡の白 兎

因幡の白 兎 の 話 を 皆 さん は 知 っ て い ま す か 。 鰐 を だ ま し て 、 隠 岐 の 島 か ら 因 幡 (今 の 鳥 取 県) へ
渡 っ て 来 た 白 兎 が 、 今 一 歩 で 陸 へ 飛 び 上 が ろ う と し た 時 に そ の 計 略 が 鰐 に 分 っ て 、 鰐 に 毛 を む し り 取 ら
れ て 赤 裸 と な り 、 痛 が っ て 泣 い て い た の を 、 た ま た ま 大 国 主 命 が 通 り か か っ て 、 助 け て お や り に な っ
た 話 で 、 よ く 童 話 に も な っ て い ま す 。

大 国 主 命 の 仁 慈

こ の 名 高 い 物 語 に 出 て く る 大 国 主 命 は す な わ ち 、 大 蛇 を 退 治 な さ っ た 素 戔 嗚 尊 の 御 子 で 、 父 の
尊 に 次 い で 出 雲 地 方 を 治 め に な っ た 方 で す 。

父 尊 と 同 じ く 武 勇 に 優 れ て お ら れ た 上 に 、 白 兎 の よ う な 小 さ な 動 物 を も 憐 れ ま れ た ほ ど に 慈 悲 深 い
親 切 な 方 で し た 。 方 々 の 悪 者 ど も を す っ か り 平 ら げ て し ま っ た 後 は 、 高 天 原 か ら 降 っ て 来 た 少 彦 名
命 と い う 非 常 に 知 恵 の あ る 方 と 力 を 協 せ て 、 荒 地 を 開 い て 農 業 を 勧 め た り 、 薬 や ま じ な い で 病 氣 を

第3話 大国主命のお国譲り

癒したりして、専ら人々の幸福をお図りになりました。

それで、大国主命の人望と威光はますます盛んになって、しまいには、出雲の政府の下に、今の山陰地方から北陸地方にかけての裏日本一帯の地方は、実によく治まっていた。

その頃、高天原の朝廷では、天照大神が、その前々からの経緯もあって、わが日本の国を永く領地として、ご自分の血筋の方達に治めさせようという決心をなされていた。丁度、御子の天忍穗耳尊も成人なされ、もはや日本の君主に立てられても良いお年頃となったので、ある日、次の如く仰せ出されました。

「豊葦原の瑞穂の国はわが子天忍穗耳尊の知らさむ国」と。
豊葦原の瑞穂の国というのはわが日本の古名でして、知らさん国というのは君となって治むべき国ということです。すなわち、わが日本に君臨すべき君主は、ここに明らかに大神の直系のお方と定められたのです。

それで、天忍穗耳尊は恭しく大神の勅を奉じて、先づ日本の様子をご覧になろうと途中までお出ましになりました。ところが、その当時のわが日本は、出雲政府の命令の及んでいる地方こそよく治まっていたが、その他の地方は、野蛮な土賊どもがそこにもここにも立て籠って、互いに争ったり戦ったりしていましたので、その騒動は一通りではありませんでした。

尊もさすがに前に進みかねて、「これは大変だ、こんなに乱れていたのではちょっと手が付けられない」と高天原へお帰りになって、その有様を大神に申し上げた。

高天原の朝廷と出雲政府との交渉

そこで高天原では、大神の命令で、八百万の神々を天の安の河原にお集めになって一大会議を開きました。いうまでもなく、問題は、豊葦原の中つ国、即ち日本全体を平定することですが、それにはどうすれば良いか？先づ第一に、最も勢力のある出雲の大国主命に国土を奉還させなければならないが、それにはどういう手段を取るべきか？戦争か？平和な談判か？

大国主命はもともと罰を受けて高天原から逐い出された素戔嗚尊の子ですから、高天原の朝廷から言いますと、もちろん、日本の正統の支配者ではありません。しかし、大国主命の方から言いますと、父尊から受け継いだ領地である上に、すでに長い年月にわたって、悪者どもを征伐し、荒地を拓いたりして、人々の利益を図って勢力を養って来たのですから、そう安々と奉還する気にもなれますまい。

若しすなおに奉還されなかったらどうするか？嘗て高天原から少彦名命を降して、大国主命と協力して国を開かせたこともあるので、それも奉還させる理由の一つとなります。しかし、それでも大国主命が承知しない時にはどうするか？議論はそれからそれへとわたって、容易に決定しませんでした。最後に、例の一番知恵のある思兼命が一策を出しました。

それは、高天原の理想は、常に平和を尊ぶのでありますので、兵を用いることは出来るだけ避けなければなりません。どこまでも平和のうちにこちらのいう事を聴いて従わせるようにすべきです。

第3話 大国主命のお国譲り

それには先づ使いを出して、豊葦原の瑞穂の国は、天照大神の直系の子孫が君となって治べき国ですの
で、ご分家にあたりますあなたは速やかにご領地を奉還して、身を退くようにという事を大国主命によく説
いて、本支順逆（木の幹と枝の順に逆らわない、本家と分家の道理）を悟らせるのが良い。しかし、
これは中々重大な任務であるので、使者にはよくよく人を選ばなければならないが、自分は天穗日命
が一番適任であると思うというのでありました。

これで衆議は一決して、天穗日命が大神の勅命を奉じて出雲へ向かわれる事に定まりました。
さて、天穗日命が降って行ってみますと、大国主命の勢力は思ったよりも盛んで、天穗日命の力で
は逆もその使命を果たすことが出来そうにありません。けれども、はるばると降って来たことで、
何とかして国土を奉還させるようにしたいと思って、天穗日命は大国主命のご機嫌を取りながらその
機会の来るのを待ちました。そのうちに三年の年月が経ちました。

高天原では、いつまで待っても天穗日命が帰って来ないので、更にまた会議を開きました。今度は
は、場合に依っては戦争をしなければなるまいからと、天稚彦という武勇に優れた者に、特に大神から天
の鹿兒弓と天の羽々矢という秘蔵の弓矢を賜って遣わされた。

ところが天稚彦は、大国主命にうまく取り入って信用されて、大国主命の娘婿にまでなって、あ
わよくば自分が大国主命に代わって、出雲地方の君主になろうというとてもない野心をさえ抱くように
なっていたので、8年にもなるまで帰りもしなければ、何の報告だにしませんでした。

高天原では、そんな事も知らず、天稚彦はその後どうなったかと心配されて、鳴女という雉を降し
て様子を見させますと、これは不幸にも射殺されてしまった。いよいよこれで、平和な手段では事は決ま
りそうにないと見極めがついた。

そこで、またもや大会議を天の安の河原に開いて、こうなった上は、もはや止むを得ないことではな
ら、いよいよ今度は威力を見せて返答を促すことにしようという事になりました。それには最も剛勇な
者を選んで派遣しなければならぬと、大將に任ぜられたのがそのころ武勇の誉れの最も高く聞こえた
建御雷命です。副将には、天鳥船命を任じました。

くにゆづ 国譲り

この第三回目の使いは、堂々と軍を率いて、出雲の伊那佐の小濱というところに着くと、すぐにそこ
で大国主命と会見した。建御雷命はおごそかに言い出しました。

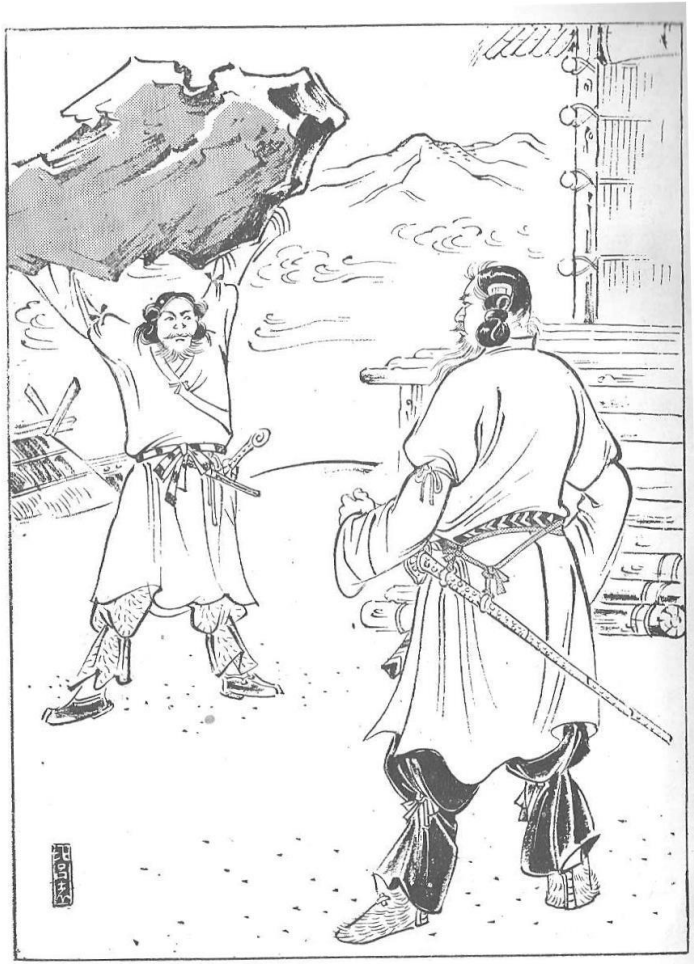
「我々は天照大神の使いである。謹んでその仰せ言をお聞きなさい。今、あなたがご支配になっ
ているこの豊葦原の中つ国は、大神の御子がお治めになることに定まっている国ですから、すでに二度ま
でも使いを出して、引渡すようにとご命令になっている。なぜ、お引渡しにならないか？ いったいど
うなさるおつもりか？ はっきりとしてご返事を承りたい」と。

今までの使い達とは違って威風堂々として、ぐづぐづ言うにおいてはそのままには置かないぞ、とい
わんばかりのその強い言葉を聞くと、大国主命は恭しく頭を下げ、「私は年を取って、今は隠居し

第3話 大国主命のお国譲り

ておりますから、そのご返事は 倅の事代主 命 が致しましょうが、ただ今、美保の崎へ 漁 で出ていて、
未だ戻ってまいりません 」とお答えした。

そこで、天鳥船 命 をやって、事代主 命 を連れ帰らせてお尋ねになると、この命はさきの
本支順逆の道理を分っておられたので、天照大神の仰せとあれば恐れ多い、この国は大神の御子にたて
まつりなさいと、即座に父の 命 に言って、自分は再び海に引き返されました。



建御名方 命 と 建御雷 命 の力競べ

これで既に事は定まったのですが、大国主命はもう一人相談をしなければならないお子があると言いました。それは建御名方 命 といって、力自慢で乱暴な方ですから、あとで騒動でも起こすといけませんので、その方と呼ばびにやろうとしておられるところへ、早くもどこでかこの事を聞きつけられて、
建御名方 命 は大きな岩を軽々と手先にささげ、猛烈な 勢 いで飛んで出て来ました。「誰だ、わしの国に来てひそひそと物を言うのは？ 何だと？ 国を譲れ？ ふむ、勝手な事を言いおるわい。 取れるものなら腕づくで取れ」と、傍若無人の大言を吐きました。

しかし、建御雷 命 と 力 競べをすると、ひとたまりもなく負かされてしまい、この命も父の命や兄の命の言うところに 従 われることになった。

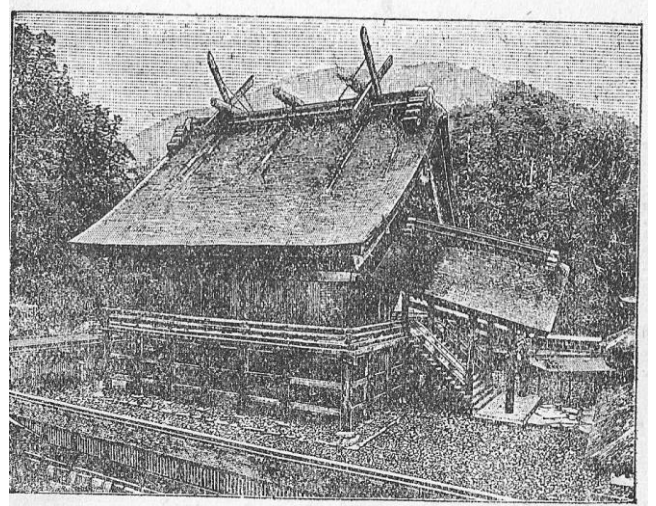
もはや大国主の命に異存のあろう筈はありませんでした。謹 んでこの国土は大神の御子に 奉 りますが、それに就いてただひとつのお願いがあります。永い 間 に大きな国を支配して来て、大国主命とも 敬 い言われた者が、俄かに 裸 一貫の身の上になって、みすばらしい住まいをするのも情けないことで

第3話 大国主命のお国譲り

ありますので、せめて住居だけは広く高く立派に造っていただきたい、そうすれば自分はそこで永久に楽隠居をするというのでありました。

建御雷命も、これは尤ものことであると同情せられ、すでに一切の領地をお譲りになった上は、お情け深い天照大神には勿論それはお許しになるでありましょうと、取りあえず命の取り計らいで、早速立派な御殿を造られました。

今の出雲大社は実にその地であると伝え



島根 出雲の大社

この時、大国主命や事代主命がよく本支順逆の大義に従われて、心よくその領地をご本家にお返しになったのはまことに立派な事でした。もしも出雲政府の方達が揃って建御名方命のように、血気にはやって武勇を競われたならば、わが国は建国のそもそもから戦争が起こって、同じ民族の間で血を流し合うような浅ましい事になったかも知れなかったのです。

その後、建御名方命は、母上である沼河比売の地である糸魚川の辺りまで落ちのびて戦い、最後は長野県の諏訪湖の近くで遂に降参され、以後、諏訪大社のご祭神として祭られています。

出雲で大量の銅剣と銅鐸の発掘 (訳者追記)

素戔鳴尊の八岐の大蛇退治の舞台になった島根県斐伊川の近くの荒神谷で、1983年に遺跡調査中に、銅剣358本、銅鐸6個、銅矛16本が谷の斜面にきれいに並べて埋められているのが見つかった。神庭荒神谷遺跡と名づけられて、出土品は全て国宝となっている。

また、今度は1996年に、荒神谷から数km南東の加茂岩倉で、ブルドーザで農道を工事中に、39個の銅鐸が掘り出された。加茂岩倉遺跡と名づけられて、全ての銅鐸は国宝となりました。銅鐸文化は出雲が発祥とされています。

これらの大発見で、古代出雲に大きな勢力(大国主命?)が存在していて、高天原勢力に吸収される過程で、出雲勢力によって隠された宝物ではなかろうかとの説があります。

(第3話 大国主命のお国譲り 終わり。

次は前頁に戻り、第4話 天孫降臨へ)